



池田 良穂

(大阪経済法科大学
客員教授)

新クルーズ学

28

新型コロナウイルス禍もようやく落ち着きを見せてきて、ポストコロナの旅行の在り方を探る動きが活発になってきています。近場の観光では、混雑して3密になりやすい公共機関を避けて乗用車での移動が増えると考えられます。しかし、地球温暖化を遅らせるためにCO2の排出を減らすという社会的ニーズも考える

と、むやみに乗用車での移動を勧めることもはばかられます。そこで考えられるのが電気自動車の活用です。電気自動車への充電を自然エネルギーで作られた電力だけにすればCO2の排出はなくなるので、そうした旅のスタイルが定着するかもしれません。観光旅行はそう頻繁にするわけではないので、都会でも、多少時間はかかっても自然エネルギーだけで充電できる供給施設ができれば嬉しいところです。こうなると観光目的の田舎の宿泊施設で、自然エネルギー由来の電力の供給ができて、移動を伴う観光

長距離移動を伴う観光は嬉しいことです。はかかっても自然エネルギーにはカーフェリーの利用が最適だと思います。公営交通機関の中では、もともとスペースがとりやすいため3密回避が容易だからです。電気乗用車の2等の大部屋もありましたが、急速にベッド化

ポストコロナのフェリー利用

長距離運転による疲れも、そして個室化が進んでおとなげです。この自然エネルギーと車のバッテリー電源の消費もありません。太陽光、風力、波の電気自動車は、一般的に走行可能距離の短い、田舎ほどその可能性は大きくなります。長距離運転による疲れも、そして個室化が進んでおとなげです。この自然エネルギーと車のバッテリー電源の消費もありません。太陽光、風力、波の電気自動車は、一般的に走行可能距離の短い、田舎ほどその可能性は大きくなります。

移動の過渡期でも、多少時間はかかっても自然エネルギーだけで充電できる供給施設ができれば嬉しいところです。こうなると観光目的の田舎の宿泊施設で、自然エネルギー由来の電力の供給ができて、移動を伴う観光



「おれんじおさか」は全室個室のフェリー。新鋭船「おれんじおさか」は全室個室のフェリー。大阪南港と東予を結ぶ新鋭船「おれんじおさか」は全室個室のフェリー。

時代のフェリーの役割を再評価するべく、筆者が事務局長を務める日本クルーズ&フェリー学会では、大阪南港と東予港を結ぶオレンジフェリーのご協力を得て、ポストコロナのフェリークルーズの実証試験を、7月初旬に実施することとしました。今回は、乗用車は使わずに、徒歩客としての乗船で、いかにウィルス感染のリスクを下げて、快適な船旅が楽しめるかを確かめることが目的です。3カ月にもわたる自粛疲れで、船旅に飢えていた会員40名が全国からやってきて、このクルーズを体験することになりました。その結果にご期待いただきたいと思います。